〔研究ノート〕

看護学生のおむつ排泄体験による意識の変化とおむつ排泄イメージの変化

木村ゆかり[1)]，吹田夕起子[2)]，長内志津子[1)]，福岡裕美子[1)]

１）青森県立保健大学健康科学部看護学科
２）日本赤十字秋田看護大学看護学部看護学科

要旨

おむつ排泄体験による学生の意識の変化及びおむつ排泄イメージの変化を明らかにすることを目的とした。研究方法は本学看護学科学生２年生で同意の得られた91名のおむつ排泄体験記録の記述内容と，おむつ体験前後に配布したおむつ排泄イメージに関する調査票を分析した。おむつ排泄体験記録は自由記載の内容の意味内容を変えずに１文節化し，コード化し類似性のあるものに分類した。おむつ排泄イメージの調査票は36項目を１点から７点までの点数で評価し，おむつ排泄体験前後の結果をｔ検定で比較した。結果，おむつを装着した時の第一印象は４つのカテゴリー，おむつ排泄体験前後での学生自身の変化は５つのカテゴリーに分類された。おむつ排泄イメージでは学生はおむつ排泄に否定的なイメージを抱いており，おむつ排泄体験前後で４項目に有意差が認められた。学生はおむつ排泄体験によりおむつは不快であるというイメージを強め，適切なおむつの使用や自然排尿を促すこと，おむつ使用者の気持ちを考えた援助の重要性を感じていた。

キーワード：看護学生，おむつ排泄体験，排泄イメージ，意識，変化

Ⅰ．はじめに

わが国では2007年に超高齢社会を迎えたが，その後も高齢化は進んでおり，平成28年版高齢社会白書[1)]の老年人口は前年度より0.7％増加し，26.7％となっている。

高齢者は障害や疾病，加齢変化などが関連し，排泄障害を生じることが多い。排泄のための自助具のひとつとしておむつが挙げられる。船津[2)]は，おむつは「排泄障害によって生活（活動）や社会参加に大きなダメージを感じ，力と言葉を失ってしまった高齢者に『もう一度トイレで排泄する』意欲と勇気を与え，安心と安全をもたらす道具になる」と述べており，おむつは使い方次第では，高齢者の自立を助けるものとなる。

一方，近年おむつの安易な使用による問題が叫ばれている。おむつの絶対適応として，体動による生命の危険度が高い術直後や症状の増悪が予測される急性期症状の場合などが挙げられる[3)]。しかし，急性期を脱し状態が変化した後も，排泄のアセスメントがなされずおむつを使用し続けた結果，寝たきり状態を作り出してしまうことが少なくない。渥美[4)]は，おむつがもたらす５つの弊害として，QOLの低下，ADLの低下，介護量の増大，スタッフのQOLの低下，費用の増大を挙げている。また，「一部の例外的ケースを除き，おむつはあくまで『一時的な手段』ととらえるべきです。現状では，看護・介護する側の都合であまりにも安易におむつが使われています。『おむつは当たり前』という発想の転換が求められているといえましょう」とも述べている。浜田[5)]は，「身体がつらくて起き上がれないときや，尿漏れがあって不安で外出できないときなど，適切なおむつの使用は要介護者本人の安心にもつながり，暮らしを広げるといっても過言ではありません。間違った使い方にこそ問題があり，おむつ自体が不要なものではありません」と述べている。高齢者の状態の変化に合わせ排泄動作のアセスメントを行い，個々の生活スタイルに合った自助具の使用，適切な排泄援助をすることが重要である。

また，おむつの不適切な使用は自尊心を傷つけるものである。梶原[6)]は，人が排泄の自律性を失うと恥の感覚を生じ，自尊心や自信が低下してしまうと述べている。実際に吉本[7)]によると，施設で排泄援助を受ける高齢者は，排泄介助を頼みにくい，排泄介助について耐えられない，という感情が出現していた。排泄トラブルがあるからおむつ，ではなく，一連の排泄動作のどこが滞っているのかを観察し，適切な援助を行わなければいけない。それは，臨地実習中の看護学生が患者へ看護ケアを提供する際にも，重要な視点であるといえる。

しかし，近年少子化・核家族化が進み，平成27年国民生活基礎調査[8)]では三世代世帯は全世帯の6.5％と年々減少しており，学生も高齢者に接する

連絡先：木村ゆかり：y_kimura2@auhw.ac.jp

機会が少なく，おむつを使用するイメージを持つことも困難になっていると思われる。また経験不足から，臨地実習で受け持った患者が既におむつを使用していた場合，なぜおむつをしているのか，おむつはその患者に必要なのかを疑問に持つことなく,「この患者さんはおむつをしている」ことを当然のこととして受け入れてしまう場合も少なくない。

渥美[4]は，自分がおむつを着けた姿をイメージし患者の思いを共有することが，おむつに頼らない看護・介護を実践するための第一歩である，と述べている。浜田[5]は，施設での介護士のおむつ排泄体験について，おむつ使用者のことをわが身に置き換えて考えるという視点を持つことで，介護士自身も大きく変わる，と述べている。現在，教育機関や施設でおむつ排泄体験を取り入れた学習効果が報告されている。田中ら[9]は，より現実的で高齢者の気持ちに沿った援助方法を導くことが期待でき，有効な教育方法と捉えられたと示している。平尾ら[10]は，おむつ装着高齢者の状況に配慮した適切な援助方法を考案する上で有効な学習体験であり，教育方法であったことの示唆が得られたと述べている。木下ら[11]は，排泄への具体的な援助，おむつを使用している人への配慮，排泄の自立など，学習への動機付けとなっていると述べており，学生が老年看護をより実践的なものとして考えることができるようになると考えられる。

このような学生の意識の変化の根底には，個人が持つ排泄のイメージがあるのではないかと考える。梶原[12]が健康な成人男女を対象として尿と便のイメージ調査を行った結果，排泄物に対して汚いなどの否定的なイメージが強い結果を示していた一方で，価値のある，健康的な，すっきりする，という肯定的なイメージも強く持っているということが明らかになった。しかし，おむつに排泄するということは健康な成人男女にとっては非日常的なものであり，おむつ排泄に対するイメージは異なるのではないかと考えられる。また，おむつ排泄体験を行うことにより，おむつ排泄に対するイメージに何らかの変化が起こる可能性がある。しかし先行研究では，学生がおむつ排泄に対しどのようなイメージを抱いていたか，そしておむつ排泄体験後にそれがどう変化したかを調査したものは見られない。

本学でも排泄援助の技術的側面だけではなく，心理面に対する援助の理解を深めることを目的に，看護学科２年生を対象に老年看護学の学習の一貫としておむつ排泄体験を実施し，体験後におむつ排泄体験記録の提出を課している。

本研究では，おむつ排泄体験での学生の学びをおむつ排泄体験記録の内容から分析し，おむつ排泄体験による学生の意識の変化を明らかにする。また，おむつ排泄体験の前後に学生のおむつ排泄イメージを調査することで，学生の看護観に与える影響を検討することができ，今後の老年看護学教育を考える上での一助となると考える。

本研究では，おむつ排泄体験による学生の意識の変化及びおむつ排泄イメージの変化を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．調査期間

平成26年12月～平成27年１月

２．対象者

本学の看護学科学生２年生107名

３．研究デザイン

１）おむつ排泄体験記録

記述的研究

２）おむつ排泄イメージ

量的研究

４．調査方法

おむつ排泄体験の前に，研究について調査説明書を配布し説明した。

１）おむつ排泄体験記録

おむつ排泄体験記録を配布し，おむつ排泄体験は学生各自に自宅で行ってもらった。後日指定した日におむつ排泄体験記録を回収した。

おむつ排泄体験記録の記録内容は，性別，おむつ使用者に接した経験の有無, おむつ交換援助の有無, おむつ交換援助方法，おむつを着用した時の第一印象，おむつ排泄体験前後の学生自身の変化とした。

２）おむつ排泄イメージ

おむつ排泄イメージ調査票＜体験前＞は全員に配布し，研究協力に同意した学生のみ回答してもらった。回収は中身の見えないボックスに入れてもらうか，研究者の研究室のレターボックスに提出してもらった。おむつ排泄体験後におむつ排泄イメージ調査票＜体験後＞を全員に配布し，おむつ排泄体験前の調査と同様に回収した。

おむつ排泄イメージは，梶原[6]の排泄イメージの調査票を参考に研究者が作成したおむつ排泄イメージ調査票＜体験前＞・おむつ排泄イメージ調査票＜体験後＞を用いた。おむつ排泄イメージを問う質問項目は表４に示した，きれい－汚い，臭くない－臭い等の意味が対になった形容詞36項目について，１点から７点までの点数で評価する。１点に近い数値ほど肯定的なイメージ，７点に近い数値ほど否定的なイメージを表す。＜体験前＞，＜体験後＞とも同じ項目とした。

５．分析方法

１）おむつ排泄体験記録

おむつ排泄体験記録の記入内容は選択肢のものは単純集計し，自由記載の部分は内容の意味内容を変えずに１文節化し，コード化して類似性のあるものに分類した。

２）おむつ排泄イメージ

おむつ排泄イメージ調査票は各項目の平均値を計算し，おむつ排泄体験前後の結果を比較した。データ分析にはSPSS Statistics ver.22を用い，ｔ検定で比較した。有意水準は５％未満とした。

表１　対象者の基本属性とおむつ使用者への援助の有無について

質問項目	n	カテゴリー	人数	%
性別	91	男性	12	13.2
		女性	79	86.8
おむつ使用者に接した経験	91	実習で接した	84	92.3
		実習以外で接した	0	0.0
		実習･実習以外両方で接した	5	5.5
		ない	2	2.2
おむつ交換援助の経験	85	実習で経験した	83	97.7
		実習以外で経験した	1	1.2
		実習･実習以外の両方で経験した	1	1.2
		ない	0	0.0
おむつ交換援助方法	85	自分が主となり援助した	29	34.1
		看護師･介護士の主導のもと援助した	56	65.9

６．倫理的配慮

調査説明書には，この研究への参加は任意であること，成績には全く影響しないこと，参加に同意した後も，いつでも不利益を被ることなく同意を撤回することができることを記載した。対象者へ依頼する際，調査説明書を研究者が読み上げ研究の趣旨を説明し，おむつ排泄イメージ調査票の提出をもって研究への同意を得たとみなした。おむつ排泄体験記録については記入内容を研究に使用しても良いか，おむつ排泄体験記録の表紙の選択肢（同意・拒否）いずれかにマル印をつけてもらい，同意へのマル印をもって同意とみなした。

取得したデータや個人情報は研究目的以外には使用しない，データには番号付けを行い匿名化する，おむつ排泄イメージ調査票はデータ入力後に裁断処理して破棄する，データは研究室内の鍵のかかった棚に施錠して保管し発表後に破棄する，発表において個人を特定できる内容は一切含まないことを説明した。また，本研究は青森県立保健大学倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号：1429）

Ⅲ．結果

１．おむつ排泄体験記録

研究データにすることに同意の得られたおむつ排泄体験記録の記述内容を分析対象とした。研究の同意が得られたのは，91名（85.0％）であった。基本属性及び実習でのおむつ使用者と接した経験の有無，おむつ交換援助の経験の有無は単純集計した。おむつを装着した時の第一印象，おむつ排泄体験前後での学生自身の変化は自由記載の内容の意味内容を変えずに１文節化し，コード化して類似性のあるものに分類した。

１）基本属性とおむつ使用者への援助の有無について

対象者の基本属性を表１に示した。性別は，男性12名（13.2％），女性79名（86.8％）だった。対象者のほぼ全員がおむつ使用者に接した経験があった。また，全員がおむつ交換援助の経験があり，ほぼ全員が実習で経験していた。おむつ交換援助は，29名（34.1％）は学生自身が主となり実施し，残りの56名（65.9％）は看護師・介護士主導のもと実施していた。なお，欠損値は分析対象から除外した。

２）おむつを装着した時の第一印象

おむつを装着した時の第一印象について表２に示した。カテゴリーは【】，サブカテゴリーは≪≫，本人体験の記述内容は「」で示す。おむつを装着した時の第一印象は，91名の記述があり，記述内容を分析した結果，総コード数は185であった。【羞恥心】【装着感】【違和感】【不安感】の４つのカテゴリー，24のサブカテゴリーが抽出された。

３）おむつ排泄体験前後の学生自身の変化

おむつ排泄体験前後の学生自身の変化について表３に示した。おむつ排泄体験前後の学生自身の変化は91名の記述があり，記述内容を分析した結果，総コード数は183であった。【おむつ排泄体験で感じたこと】【おむつ使用者の気持ちがわかった】【おむつ

表２　おむつを装着した時の第一印象

カテゴリー	サブカテゴリー
羞恥心	おむつ装着自体への羞恥心
	おむつ装着を気づかれることへの羞恥心
	外見の変化による羞恥心
	自尊感情の低下
装着感	肌触りが気になる
	掻痒感
	動きにくい
	おむつの厚さが気になる
	思っていたよりも良い面
	フィット感がない
	きつい
	もたつく
	履き心地が悪い
	装着しにくい
違和感	おむつ装着自体の違和感
	衣服着用時の違和感
	違和感のなさ
不安感	おむつ装着自体の不安感
	安心感がある
	装着方法への不安感
	漏れへの不安感
	吸収できるか不安
	蒸れへの不安

表３　おむつ排泄体験前後の学生自身の変化

カテゴリー	サブカテゴリー
おむつ排泄体験で感じたこと	おむつ排泄への抵抗感
	体位によるおむつ排泄の難しさ
	不安感
	違和感
	羞恥心
	排泄後の不快感
	排泄後の蒸れ
	排泄後の臭気の不安
	排泄後のおむつの重み
おむつ使用者の気持ちがわかった	体験をしたことで気持ちがわかった
	実習場面を振り返り,気持ちがわかった
	今までの自分の気持ちを振り返った
おむつ排泄の影響を考えた	おむつ交換を受ける苦痛
	自尊感情の低下
おむつ使用者への援助を考えた	おむつ使用者の気持ちを理解して接する
	プライバシーへの配慮
	排尿後は時間をおかず,おむつ交換する
	的確な技術
	陰部洗浄の重要性
	自然排泄を促す重要性
おむつの機能性について考えた	おむつの重要性
	おむつの機能性

排泄の影響を考えた】【おむつ使用者への援助を考えた】【おむつの機能について考えた】の５つのカテゴリー，22のサブカテゴリーが抽出された。

２．おむつ排泄イメージ

おむつイメージ調査票＜体験前＞は103名の回答があり，回収率は96.3％であった。その内，有効回答数102で有効回答率99.0％であった。おむつイメージ調査票＜体験後＞は83名の回答があり，回収率は77.6％であった。その内，有効回答数82で有効回答率98.8％であった。

おむつ排泄体験前後におけるおむつ排泄イメージの平均値とイメージの変化を表４に示した。体験前・体験後ともに全ての平均値は5.1であった。各項目の平均値は３点から７点の間に位置していた。平均値を特に下回った項目は，おむつ排泄体験前では重い－軽い（3.2），重要な－重要でない（3.3），軟らかい－硬い（3.4），価値のある－価値の無い（3.4），大切な－大切でない（3.5），大きい－小さい（3.5）の６項目，おむつ排泄体験後は，重い－軽い（3.1），軟らかい－硬い（3.3），大切な－大切でない（3.4），重要な－重要でない（3.4），価値のある－価値の無い（3.5）の５項目であった。

体験後の平均値が体験前の平均値より高かった（否定的変化があった）項目は，価値のある－価値の無い，良い－悪い，見たい－見たくない，触りたい－触りたくない，安心な－不安な，日常的な－非日常的な，力強い－弱々しい，洗いたくない－洗いたい，流したくない－流したい，しゃれた－やぼったい，大きい－小さい，重要な－重要でない，の12項目であった。最も否定的変化があった項目は，洗いたくない－洗いたい（4.7→5.5）であった。体験後の平均値が体験前の平均値より低かった（肯定的変化があった）項目は，臭くない－臭い，快適な－不愉快な，好ましい－嫌らしい，親しみやすい－親しみにくい，陽気な－陰気な，ざらざらした－ぬるぬるした，重い－軽い，温かい－冷たい，軟らかい－硬い，大切な－大切でない，さっぱりした－ねっとりした，気分がいい－気分が悪い，すっきりする－すっきりしない，の13項目であった。最も肯定的変化があった項目は，さっぱりした－ねっとりした（5.7→5.1）であった。

おむつ排泄体験前後でおむつ排泄イメージの変化において有意差が認められた項目は４項目で，臭くない－臭い（5.8→5.3，$p<0.05$），洗いたくない－洗いたい（4.7→5.5，$p<0.01$），流したくない－流したい（5.4→5.9，$p<0.05$），さっぱりした－ねっとりした（5.7→5.1，$P<0.01$）であった。

Ⅳ．考察

１．基本属性

学生は，実習あるいは実習以外でほぼ全員がおむつ使用者に接していた。また，全ての学生がおむつ交換援助を経験していた。学生は２年生であり，おむつ交換について学内演習を行い，１年生で基礎看護実習Ⅰ，２年生で基礎看護実習Ⅱを終えているため，このような結果になっていると考えられる。学生の半数以上は看護師・介護士の主導のもとおむつ交換援助を経験しており，手技が確立しているとは言いがたい。

２．おむつを装着した時の第一印象

おむつを装着した時の第一印象として，４つのカテゴリーのうち【装着感】についての記述が最も多かった。学生はおむつ交換援助の経験はあっても，実際に自分がおむつを装着するのは初めてであり，普段の下着とは異なる肌触り，動きにくさ，おむつの厚さ，履き心地などを実感していた。【違和感】については，普段身に着けないものだと感じたなど≪おむつ装着自体の違和感≫についての記述が多く見られ，おむつは日常的ではないものであると捉えていると考えられる。このことから，学生はおむつの装着自体に【羞恥心】を感じ，他人に気づかれることの羞恥心，外見が変化することについての羞恥心を持っていた。そして，これからおむつに排泄することを考えて，漏れや蒸れへの不安，おむつが尿をきちんと吸収できるのかなどの【不安感】を表出していた。田中[9]は，学生のおむつ排尿体験の記述内容を分析した結果，尿漏れへの心配・不安が表現されており，大半の学生がおむつの着用が初めてでおむつのサイズが自分の体形と適合しないことや，普段着用の下着とは異なり，密着感の無さから生じたと捉えられると述べている。今回も学生は自分で着用した経験が無く，おむつ交換の手技が確立していないことから体にフィットさせて装着することが難しく，手技への不安や漏れへの不安を強めていたと考えられる。一方で，「予想よりも安心感が

表４　おむつ排泄前後におけるおむつ排泄イメージの平均値とイメージの変化

選択項目	体験前の平均値	体験後の平均値	イメージの変化	t 検定
きれい－汚い	5.4	5.4		
臭くない－臭い	5.8	5.3	○	＊
好き－嫌い	6.1	6.1		
価値のある－価値の無い	3.4	3.5	▼	
良い－悪い	4.3	4.5	▼	
清潔な－不潔な	5.4	5.4		
上品な－下品な	5.0	5.0		
見せたい－隠したい	6.7	6.7		
見たい－見たくない	5.8	6.1	▼	
胸が落ち着く－胸がムカツク	5.4	5.4		
触りたい－触りたくない	5.8	5.9	▼	
快適な－不愉快な	6.1	6.0	○	
好ましい－嫌らしい	5.5	5.4	○	
親しみやすい－親しみにくい	5.6	5.5	○	
安心な－不安な	5.4	5.6	▼	
健康的な－病的な	5.4	5.4		
明るい－暗い	5.4	5.4		
陽気な－陰気な	5.5	5.4	○	
日常的な－非日常的な	5.5	5.6	▼	
ざらざらした－ぬるぬるした	4.9	4.7	○	
重い－軽い	3.2	3.1	○	
温かい－冷たい	4.1	3.9	○	
軟らかい－硬い	3.4	3.3	○	
力強い－弱々しい	4.6	4.7	▼	
太い－細い	4.1	4.1		
洗いたくない－洗いたい	4.7	5.5	▼	＊＊
流したくない－流したい	5.4	5.9	▼	＊
しゃれた－やぼったい	5.4	5.5	▼	
大切な－大切でない	3.5	3.4	○	
さわやかな－うっとおしい	5.5	5.5		
さっぱりした－ねっとりした	5.7	5.1	○	＊＊
大きい－小さい	3.5	3.6	▼	
気分がいい－気分が悪い	6.0	5.8	○	
すっきりする－すっきりしない	5.9	5.8	○	
重要な－重要でない	3.3	3.4	▼	
誇らしい－恥ずかしい	6.2	6.2		

○:肯定的変化　▼:否定的変化　＊:$p<0.05$　＊＊:$p<0.01$　空欄:n.s

あった」「違和感が無い」という記述もあった。これは，おむつ排泄体験前におむつ排泄へ悪いイメージを持っていたため，実際に体験したことでおむつの良い部分を実感することができたのではないかと考える。

３．おむつ排泄体験前後の学生自身の変化

おむつ排泄体験前後の学生自身の変化として,【おむつ排泄体験で感じたこと】の記述が最も多く，おむつ排泄を試みたことで「尿意があるからといって，すぐにおむつに排泄できない」などの≪おむつ排泄への抵抗感≫,「仰臥位では思ったより腹圧をかけにくい」などの≪体位によるおむつ排泄の難しさ≫を感じていた。≪排泄後の不快感≫≪排泄後の蒸れ≫≪排泄後の臭気の不安≫は，実際におむつに排泄して感じることができたのではないかと考えられる。≪排泄後の不快感≫は22のサブカテゴリー中で記述数が最も多かった。「おむつを着けているだけでも違和感があるのに，その中に排泄をするというのはかなり不快だった」「思ったよりも不快だった」という記述が多かった。また,「排尿後はおむつが生暖かく湿ってとても不快だった」「少し時間がたつと冷たくなり不快だった」など，排泄後もおむつをすぐに外さずに排泄後のおむつの感覚を体験した学生もいた。本研究ではおむつを外すタイミングについては指示していなかったが，学生は今回の体験でおむつ使用者の気持ちを少しでも理解しようと，工夫したのではないかと考えられる。

【おむつ使用者の気持ちがわかった】では，学生は「おむつの使用でどのようなことが気になり，ストレスになるのかを自分なりに感じることができた」など，おむつ使用者への共感の気持ちを持つことができていた。また,「実習で看護師が一人一人

の患者に，学生もおむつ交換援助に入っても良いか確認していた意味がわかった」「決まった時間におむつ交換を行っていたが，患者はずっと不快な思いをしていたのだと気づいた」など，実習場面を振り返り，おむつ排泄体験を通して自分なりに意味づけができていた。学生は実習でおむつ使用者と接し，おむつ交換援助を行った経験が既にあったことで，おむつ排泄体験で実感したことを患者の思いとして理解しやすかったのではないかと考える。

さらに，【おむつ排泄の影響を考えた】ことで，学生はおむつ使用者がおむつ交換援助を受ける際の思いを想像することができていた。「おむつに排泄することだけでも恥ずかしいのに，その後の処置を行ってもらうと想像すると抵抗感がある」など≪おむつ交換を受ける苦痛≫や≪自尊感情低下≫についても考えが及んでいた。

そして，学生はおむつ使用者への援助についても考えることができていた。【おむつ使用者への援助を考えた】では，「プライバシーに配慮して環境を整えることを重要視しなければならない」「排泄後はすぐにおむつを取り替え，陰部洗浄を行う」「もっとすばやくおむつ交換できるようになりたい」など技術・環境面の記述が多く見られたが，最も多かったのは≪おむつ使用者の気持ちを理解して接する≫であった。「おむつを使用する一人一人の感情を理解してケアすることがとても重要であるという思いが強くなった」「おむつ使用者の気持ちに寄り添いながらケアの工夫点を見つける」など，おむつ使用者の個別性を考えたケアを行う重要性について述べられていた。≪自然排泄を促す重要性≫では，「簡単におむつ排泄に切り替えるのではなく，自然排尿を促す援助の必要性を改めて認識した」「できるだけ普段どおりに排泄が行えるように，環境を整えたりポータブルトイレの使用などケアの仕方を工夫していきたいと思った」など，適切な排泄ケアについて具体的に考えることができていた。

また，「尿失禁がある人にとって，おむつがあるのとないのとでは全然違うんだなと思った」など【おむつの機能性について考えた】記述も見られ，おむつの有用性を考えることができていた。おむつは不要なものと決めつけず，柔軟におむつ排泄について考えようとしていた。

上平ら[13]は，おむつ着用体験は対象理解につながる不快感の理解のみにとどまらず，排泄への適切な援助の理解に有効であることが示唆されたこと，学生自ら体験することにより看護的視点の広がりが明らかになり，おむつの利点と欠点の両方の視点を持つことにつながったことを述べている。本研究でも同様の結果が得られており，おむつ排泄体験はおむつ使用者の気持ちの理解を深めたとともに，今後学生が臨地実習などで排泄ケアを具体的に提供する際に役立つと考えられる。

４．おむつ排泄イメージ

おむつ排泄体験前・体験後の得点の平均値は全て３点から７点の間であり，全体的に否定的なイメージに傾いていた。梶原[12]の研究では，便のイメージ得点の平均値は２点から５点の間に位置し，尿のイメージ得点の平均値は便のイメージより肯定的なイメージに傾いていた。今回の調査では，価値のある－価値の無い，重い－軽い，軟らかい－硬い，大切な－大切でない，大きい－小さい，重要な－重要でない，の６項目のみが特に平均値を下回り，肯定的なイメージに傾いていた。これらのことから，学生はおむつ排泄について全体的に否定的なイメージで捉えており，おむつを使用者にとっておむつは重要で価値のあるものだが，一般的な排泄のように日常的ではなく，さっぱりするものではないとイメージしていることが考えられた。

今回，おむつ排泄体験前後でおむつ排泄イメージの変化において有意差が認められた項目は臭くない－臭い，洗いたくない－洗いたい，流したくない－流したい，さっぱりした－ねっとりしたであった，の４項目であった。これらは，おむつに実際に排尿した結果，排尿後の不快感が強かったためではないかと考える。

Ⅴ．おわりに

学生はおむつ排泄体験により「おむつは不快である」というイメージを強め，適切なおむつの使用や自然排尿を促すこと，おむつ使用者の気持ちを考えた援助の重要性を感じていた。これから学生は臨地実習を重ね，おむつ使用者に接する機会もさらに増えていく。今後，おむつ排泄体験での学びは実際に援助に活かされていたのか，経験を重ねることでおむつイメージは変化するのかを調査することも有用であると考える。

調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

Ⅵ．引用文献

１）内閣府, 平成28年版高齢社会白書 http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html（2016年９月20日アクセス可能）
２）船津良夫：おむつの知識と排泄ケアvol.1適切なおむつの使い方とは？，おはよう21, 中央法規, 283号, 42, 2012
３）渡邉順子：おむつによる排泄ケア, 穴澤卓夫, 後藤百万, 高尾良彦, 本間之夫, 前田耕太郎編, 排泄リハビリテーション　理論と臨床（第１版), 中山書店, 280, 2009
４）渥美京子：おむつを減らす看護・介護　おむつに頼らない高齢者の看護・介護マニュアル（第１版），田中とも江監修, 医学芸術社, 12・16・34, 2003
５）浜田きよ子：基礎から学ぶ介護シリーズ　自立を促す排泄ケア・排泄用具活用術（第１版），中央法規, 12・149－150, 2010

６）梶原睦子：排泄の心理学, 穴澤卓夫, 後藤百万, 高尾良彦, 本間之夫, 前田耕太郎編, 排泄リハビリテーション　理論と臨床（第１版）, 中山書店, 18－20・23－24, 2009
７）吉本和樹：施設で排泄援助を受ける高齢者の体験, 老年看護学, 13(1), 57－64, 2008
８）厚生労働省, 平成27年国民生活基礎調査 http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html（2016年９月20日アクセス可能）
９）田中美江, 河原畑尚美, 平尾由美子ら：「排尿機能低下のある高齢者の援助」の理解のための教育方法の効果－その２　学生の「おむつ排尿体験時の困ったこと, 心配・不安だったこと」のレポート分析から―, 北日本看護学会誌, 14（2）, 11－19, 2012
10）平尾由美子, 河原畑尚美, 田中美江ら：「排尿機能低下のある高齢者の援助」の理解のための教育方法の効果－その１　学生の「おむつ排尿体験の際に工夫したこと」のレポート分析から―, 北日本看護学会誌, 14(2), 1－9, 2012
11）木下照子, 桝本朋子, 平上久美子：オムツ体験学習から得られた教材要因, 第40回日本看護学会論文集　看護教育, 155－157, 2009
12）梶原睦子, 根本秀美, 髙橋知勢子：人は便をどのようなイメージで捉えているか, 第16回日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 11（1）, 34, 2007
13）上平公子, 松村三千子：老年臨床看護におけるオムツ着用体験による学びの変化, 岐阜医療科学大学紀要, ３号, 143－151, 2009